

明治期の小学校唱歌科における唱歌教材に関する研究

—音楽的要素に着目して—

山田 めぐみ

(本講座大学院博士課程前期在学)

Research on Song Teaching Materials in the Department of an Elementary School Song in Meiji Era: With a Focus on Musical Elements

Megumi YAMADA

Abstract

In Japan, school music education was started in Meiji 5 as Singing. And in Meiji Era, some educational thought entered from foreign countries.

The purpose of this study is to reveal features of five song books: “*shougaku-syokasyu*”, “*shougaku-syouka*”, “*kyouka-tekiyou-younen-syouka*”, “*shinpen-kyouiku-syokasyu*”, “*jinjyou-syougaku-syouka*” by analyzing them. And in a main subject, changes of the song teaching materials in Meiji Era are discussed. Those song books were main teaching materials in Meiji Era, and they were widely dealt with by elementary education. Analytic viewpoints are time, key, musical range, note value, and musical interval. Analyzing those song books, the following features were revealed. First, as time and note value, music which considers children’s sentiment and a developmental stage generates a light tune by using short note value, dotted rhythms, and two-four time and so on. Second, as it becomes in the second half of Meiji, song teaching materials take children’s developmental stage into consideration more. Concretely, the following point is mentioned : as it becomes in the second half of Meiji, musical range becomes narrower and the proportion of complex musical interval and long note value which require children of high technique to sing decreases more.

I 研究の背景と目的

我が国の学校における音楽教育は、明治5（1872）年に教科として「唱歌科」が設置されたのが始まりであり、昭和16年の法改正まで唱歌教育を中心として行われた。明治初期に、①身体的な効果、②精神的な効果、③道徳的な効果があるとして始められた唱歌科は、昭和初期に至るまで「徳性ノ涵養」という道徳的な目標を第1の目標として掲げることになる。明治中期に入ると、明治政府が実施した「脱亜入欧」「富国強兵」に江戸時代からの儒教思想が加わり、国家主義思想が大きく台頭した。これは日清戦争を契機としてさらに強まり、軍国主義へとつながっていった。したがって、身体的な効果、精神的な効果、道徳的な効果があるものとして始められた唱歌教育は、明治後期になると、国家主義や軍国主義の影響を色濃く受けるようになる。また、明治期にはヘルバルト教育学を代表とする教育思想が諸外国から入ってきたり、国内で言文一致運動が起こる。

三村（1993）は、『唱歌教材目録（明治編）』（国立音楽大学音楽研究所編1980）、及び『唱歌索引（明治編）』の昭和55年度版追録（国立音楽大学音楽研究所編1985）に記載されている唱歌集のうち、題名、緒言、あるいは歌詞によって幼稚園に関連する唱歌集であることが明白なものを全て選び、音楽的側面、及び歌詞内容の持つ意味的側面の二方向から分析を行っている。音楽的側面としては、音域、音程、音価

を調査し、算出された統計量をもとに年代順に比較考察を行った。しかし三村は、小学校用の唱歌集の分析は行っていない。また、『小学唱歌集』や『尋常小学唱歌』を分析対象とした研究（杉田 2000, 山本 1985）が多く見られる一方、小学校教育で扱われたその他の唱歌集も含め、『小学唱歌集』から『尋常小学唱歌』までの明治期の唱歌教材を、音楽的側面から体系的に分析した研究は、あまり見られない。さらに、三村が行った、音楽的側面の分析の視点に新たな要素を加えることによって、唱歌教材がもつ音楽的特徴によりせまることができるのではないだろうか。

そこで本研究では、音楽取調掛によって発行された我が国最初の唱歌教科書である『小学唱歌集』全3編（明治 15～17 年）や、明治 44 年から大正 3 年にかけて文部省から発行され、全国の小学校に広く普及し、非常に影響力の強かった『尋常小学唱歌』をはじめとする、小学校教育で扱われた主要な唱歌集を採りあげて研究を進めていくことにする。拍子、調性、音域、音価、音程といった側面から教材の分析を行ない、それぞれの唱歌教材の特徴を検証する。なかでも本論では、分析結果をもとに、明治期の唱歌教材の変遷を明らかにすることを目的とする。

II 分析方法

本研究では、唱歌教材に関して、拍子、調性、音域、音価、音程の視点から分析を行う。対象とする唱歌集は、海後宗臣編（1965）『日本教科書体系 近代編 第二十五卷 唱歌』に記載されている唱歌集のうち、小学校教育で扱われた『小学唱歌集』、『小学唱歌』、『教科適用幼年唱歌』、『新編教育唱歌集』、『尋常小学唱歌』とする。拍子に関しては、扱われている拍子が、明治期を通してどのように変遷しているのか見ていきたい。調性に関しては、長音階、短音階、日本音階に分類し、長音階、短音階については、さらにその中で調性にも着目する。また、四七抜き、四抜き、七抜き音階にも分類する。音域に関しては、曲における最低音と最高音に着目する。また、音価に関しては、拍子記号に基づいた 1 拍を 1 とし、歌詞の一文字毎に計算する。音程に関しては、旋律において隣接する音の音程関係を調査する。その際、児童にとっていかに歌いやすい旋律であるかということに着目するため、拍子記号に基づいた 1 拍以上の休符がある場合は、フレーズが一旦区切れていると考え、休符の前後の音は隣接する音として見なさないこととする。音程、音価の分析では、歌詞の 1 番のみを対象とし、合計数と百分率を算出する。また、二声部以上ある曲の場合は、主旋律を分析対象とする。音域や音価、そして音程の分析では、児童の発達段階を考慮しているか、ということをもとに軸にして考察していく。

また、明治期における唱歌教材の変遷をたどるにあたり、日清戦争と日露戦争を境として、『小学唱歌集』と『小学唱歌』を明治前期、『教科適用幼年唱歌』を明治中期、『新編教育唱歌集』と『尋常小学唱歌』を明治後期と位置づけて論を進めていく。

III 明治期の小学校唱歌科における唱歌教材の変遷

表 1 拍子の変遷

	2/4	3/4	4/4	3/8	4/8	6/8	2/2	3/2
小学唱歌集	13.19	15.38	54.94	0	1.10	12.09	2.20	1.10
小学唱歌	17.65	6.54	67.32	0	0.65	5.88	0.65	1.31
教科適用幼年唱歌	84.09	3.41	7.96	0	0	2.27	2.27	0
新編教育唱歌集	33.88	4.90	55.51	0.82	1.63	2.44	0.82	0
尋常小学唱歌	35.83	5.00	54.17	0	0.83	4.17	0	0

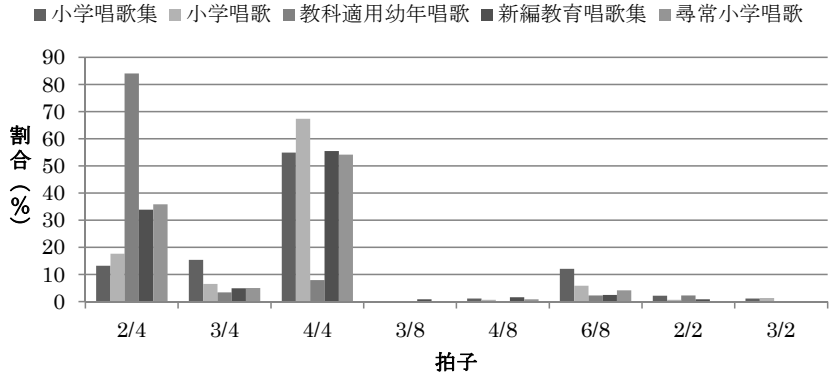


図1 拍子の変遷

拍子に関して、全唱歌集において4分の2拍子と4分の4拍子の曲が占める割合が高いことから、明治前期から後期を通して、4分の2拍子と4分の4拍子は、基本的な拍子として重視されていたことが明らかになった。4分の4拍子の曲は、明治前期と後期の唱歌集において、50%以上を占めている。明治中期の『教科適用幼年唱歌』では、4分の2拍子の曲が8割以上を占めており、これは他の唱歌集と比較して特徴的なことといえる。『教科適用幼年唱歌』には、軽快な曲が多く含まれ、「桃太郎」や「金太郎」を代表として、現在でも数多くの曲が歌われている。また、『教科適用幼年唱歌』以前に編纂された『小学唱歌集』と『小学唱歌』に比べて、『教科適用幼年唱歌』より後に編纂された『新編教育唱歌集』と『尋常小学唱歌』の方が、4分の2拍子の曲が占める割合が高いことから、明治後期にかけて4分の2拍子の曲が増えていったことが分かる。これは、児童の発達段階を考慮して、児童の心情に合った曲を積極的に採り入れていった結果と考えることができる。4分の3拍子は、明治後期よりも明治前期の方が多く見られるが、これは4分の2拍子が増加したことに関連していると考えられる。8分音符を1拍とした曲は、全体を通してあまり見られない。

表2 調性の変遷

	Cdur	Gdur	Fdur	Ddur	Adur	Edur	Esdur	Asdur	Bdur	c moll	e moll	f moll	a moll	g moll	d moll	日本音階
小学唱歌集	30.44	16.30	13.04	11.96	3.26	2.17	3.26	1.09	0	0	1.09	1.09	2.17	2.17	3.26	8.70
小学唱歌	6.49	27.92	11.04	10.39	5.19	0.65	2.60	2.60	3.90	0	1.95	0	1.30	0	0	25.97
教科適用幼年唱歌	11.24	29.21	37.08	14.61	0	1.12	0	0	4.50	0	0	0	0	0	1.12	1.12
新編教育唱歌集	13.36	24.30	21.46	19.84	0.40	0.40	0.40	0	4.86	0	0.40	0	2.03	0.81	0.81	10.93
尋常小学唱歌	9.17	31.67	27.50	20.84	1.67	0	2.50	0	0.83	0.83	2.50	0	0.83	0.83	0	0.83

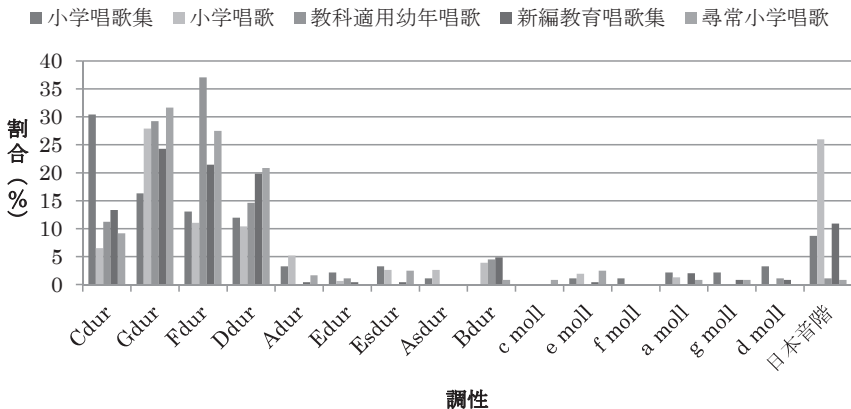


図2 調性の変遷

調性に関して、明治前期から後期を通して、Gdurの曲が多いことが明らかになった。『小学唱歌』や『新編小学唱歌集』、また、『尋常小学唱歌』では、唱歌集の中でGdurの曲が占める割合が最も高く、『小学唱歌集』と『教科適用幼年唱歌』ではGdurの曲数が2番目に多い。Gdurに次いで、Fdurの曲も全唱歌集を通して比較的多く見られ、その割合は、明治前期よりも明治中期と後期で高くなっている。そのなかでも、『教科適用幼年唱歌』では、Fdurの曲が4割近くを占めている。Cdurの曲は、『小学唱歌集』では約3割を占めていたが、明治中期・後期では、その数は減少する。Ddurの曲は、全ての唱歌集で見られるが、『尋常小学唱歌』のみで曲数が2割をこえる。Bdurの曲は、『小学唱歌』以降の唱歌集であられる。また、AdurとEsdurの曲は、『教科適用幼年唱歌』以外、Edurの曲は、『尋常小学唱歌』以外の唱歌集で見られる。Asdurの曲は、『教科適用幼年唱歌』以降の唱歌集には見られなかった。また、調号が3つ以上の曲と短調の曲は、全体を通して非常に少ないことが明らかになった。そして、明治前期より、明治中期・後期の唱歌集の方が、調号が3つ以上の長調の曲の割合が低くなっている。さらに、長調・短調を通して、調号が4つの調性は、『尋常小学唱歌』では全く見られないことも明らかになった。これらのことから、明治後期にかけて、児童にとってより負担の少ない調号の曲が用いられたと考えられる。短調の曲が占める割合は、『小学唱歌集』が計8.70%と最も多く、次いで『尋常小学唱歌』で計5.00%、『新編教育唱歌集』で計4.05%と続く。日本音階の曲が占める割合は、『小学唱歌』で最も高く、『尋常小学唱歌』で最も低い。『小学唱歌』で日本音階の曲が多い理由として、編纂した伊澤修二が、和洋折衷を理想としていたことがあげられる。

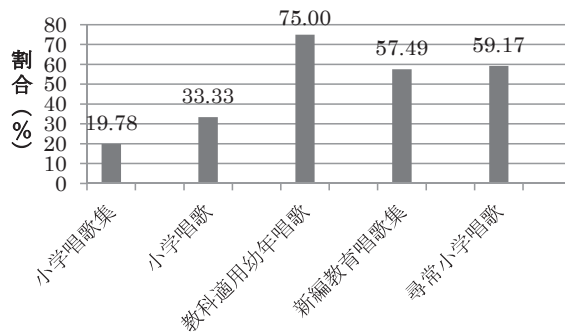


図3 四七抜き・四抜き・七抜き音階の割合の変遷

四七抜き・四抜き・七抜き音階の割合に関して、『教科適用幼年唱歌』で最も高く、『小学唱歌集』で最も低いことが分かった。また、明治期を通して、いちばん割合が高いのは明治中期であるが、明治前期より、明治中期・後期の方が、四七抜き・四抜き・七抜き音階の割合が高いことが明らかになった。このことから、明治後期にかけて、唱歌調のスタイルが定着していったと考えることができる。

表3 最低音・最高音・音域の変遷

	最低音	最高音	音域
小学唱歌集	ト	2点ト	2oct
小学唱歌	イ	2点嬰へ	1oct長6度
教科適用幼年唱歌	イ	2点ホ	1oct完全5度
新編教育唱歌集	イ	2点嬰へ	1oct長6度
尋常小学唱歌	変ロ	2点ホ	1oct増4度

各唱歌集の最低音は、『小学唱歌集』ではト、『尋常小学唱歌』では変ロとなっている。また、各唱歌集の最高音は、『小学唱歌集』では2点ト、『尋常小学唱歌』では2点ホとなっている。さらに、各唱歌集の音域は、『小学唱歌集』では2オクターヴ、『尋常小学唱歌』では1オクターヴ増4度となっている。これらのことから、明治後期の『尋常小学唱歌』では、音域が若干狭まっていることが明らかになった。

これは、明治後期にかけて、児童の声域を考慮する動きが見られたと考えることができる。

表4 音価の変遷

	1/8	1/4	3/8	1/2	3/4	7/8	1	5/4	3/2	2	9/4	5/2	3	7/2	4	5	6	7	8
小学唱歌集	0	0.68	0	9.34	0.66	0	57.48	0	3.57	22.95	0	0.16	3.95	0.05	0.61	0.28	0.21	0.03	0.03
小学唱歌	0	2.43	0	14.77	2.35	0	56.88	0.01	5.16	13.45	0	0.04	4.13	0.01	0.47	0.28	0.01	0.01	0
教科適用幼年唱歌	0.47	19.58	0.47	38.98	17.56	0	14.89	0.02	5.61	1.70	0	0	0.49	0	0.04	0.19	0	0	0
新編教育唱歌集	0.12	8.25	0.11	21.86	8.09	0	42.86	0	6.54	8.87	0	0.05	2.97	0	0.09	0.14	0.05	0	0
尋常小学唱歌	0	5.95	0	30.37	5.41	0	39.24	0	8.76	7.35	0	0	2.68	0	0.21	0.03	0	0	0

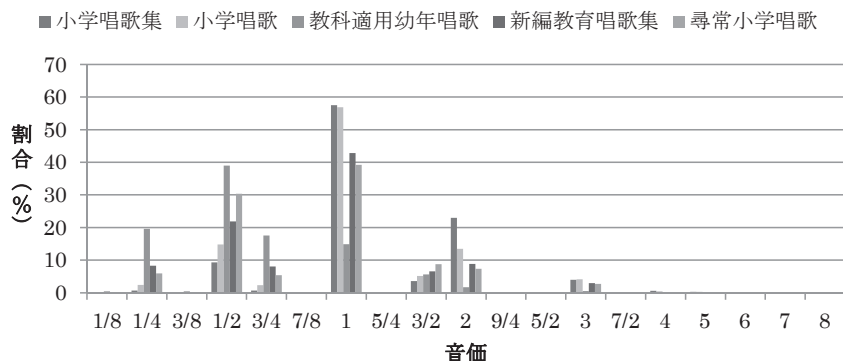


図4 音価の変遷

音価に関して、明治前期から後期を通して、基本的に基本拍ののった歌詞の付け方が多いことが明らかになった。基本拍の1/8倍の音価は、『教科適用幼年唱歌』と『新編教育唱歌集』で見られる。基本拍の1/4倍の音価は、全唱歌集において見られ、『教科適用幼年唱歌』でその割合が最も高く、次いで『新編教育唱歌集』で多く見られる。また、『小学唱歌集』では、ほとんど見られない。基本拍の3/8倍の音価は、『教科適用幼年唱歌』と『新編教育唱歌集』で見られる。基本拍の1/2倍と基本拍の3/4倍の音価は、全唱歌集において見られ、『教科適用幼年唱歌』でその割合が最も高い。また、基本拍の1/2倍の音価は、明治中期と後期で割合が高くなっている。さらに、基本拍の3/4倍の音価と、基本拍の1/4倍の音価を組み合わせて用いられる、いわゆるピョンコ節とよばれるリズムが明治中期と後期で多く用いられている。これは、唱歌調スタイルの典型的なリズムであり、四七抜き・四抜き・七抜き音階とともに、唱歌調スタイルが、明治後期にかけて定着していったと考えることができる。基本拍の音価は、全唱歌集において多く見られる。特に、明治前期においてその割合が高く、『小学唱歌集』で最も多く見られる。基本拍の5/4倍の音価は、『小学唱歌』と『教科適用幼年唱歌』において見られるが、その割合は低い。基本拍の3/2倍の音価は、全唱歌集において見られ、特に明治中期と後期における割合が高い。基本拍の2倍の音価も全唱歌集において見られるが、明治前期においてその割合が高く、『小学唱歌集』で最も多く見られる。一方、『教科適用幼年唱歌』ではあまり見られない。基本拍の5/2倍の音価は、『小学唱歌集』と『小学唱歌』、そして『新編教育唱歌集』において見られるが、その割合は低い。基本拍の3倍の音価は、全唱歌集において見られ、明治前期でその割合が高く、『小学唱歌』で最も多く見られる。基本拍の7/2倍の音価は、『小学唱歌集』と『小学唱歌』でわずかに見られる。基本拍の4倍の音価と基本拍の5倍の音価は、全唱歌集を通して見られ、明治前期においてその割合が高い。基本拍の6倍の音価は、『小学唱歌集』と『小学唱歌』、そして、『新編教育唱歌集』においてわずかに見られる。基本拍の7倍の音価は、『小学唱歌集』と『小学唱歌』に、また、基本拍の8倍の音価は、『小学唱歌集』においてわずかに見られる。唱歌集ごとの特徴として、『教科適用幼年唱歌』では、基本拍の1/4倍や1/2倍、また、基本拍の3/4倍といった短い音価が多く見られる。『尋常小学唱歌』では、基本拍の1/2倍の音価の割合が2番目に高い。また、『教科適用幼年唱歌』や『尋常小学唱歌』では、基本拍の6倍以上の音価は見られない。これらのことから、『教科適用幼年唱歌』と『尋常小学唱歌』では、比較的短い音価を積極的に採り入れていることが分かる。ま

た、『新編教育唱歌集』では、基本拍の6倍の音価が見られるとともに、基本拍より短い音価も、『教科適用幼年唱歌』や『尋常小学唱歌』と並んで多く採り入れている。基本拍の7倍以上といった長い音価は、『小学唱歌集』や『小学唱歌』にしかみられない。これらのことから、明治前期から後期にかけて、長い音価から短い音価へと、比重が移り変わっていることが明らかになった。これは、明治後期にかけて、児童の心情に合った軽快なリズムや付点のリズムが多く採り入れられるようになったこと、また、歌うのに技術を要する長い音価を避けるなどの、児童の発達段階を考慮した音価が用いられるようになったことが背景にあると考えることができる。

表5 音程の変遷

	完全1度	増1度	短2度	長2度	短3度	長3度	完全4度	増4度	減5度	完全5度	短6度	長6度	短7度	長7度	1oct	1oct短2度
小学唱歌集	22.01	0	13.86	39.68	11.85	3.72	5.91	0.07	0.02	1.36	0.57	0.28	0.31	0.02	0.32	0.02
小学唱歌	21.90	0	11.68	40.86	11.62	4.38	6.78	0.01	0.07	1.38	0.34	0.76	0.04	0	0.18	0
教科適用幼年唱歌	27.92	0	5.31	40.29	12.37	4.48	6.03	0	0.06	2.42	0.19	0.56	0.08	0	0.29	0
新編教育唱歌集	24.30	0	7.10	40.37	13.54	5.37	6.42	0.02	0.02	1.65	0.24	0.47	0.08	0	0.42	0
尋常小学唱歌	24.06	0	7.70	40.85	11.56	5.96	7.58	0	0.02	1.62	0.11	0.31	0.02	0	0.21	0

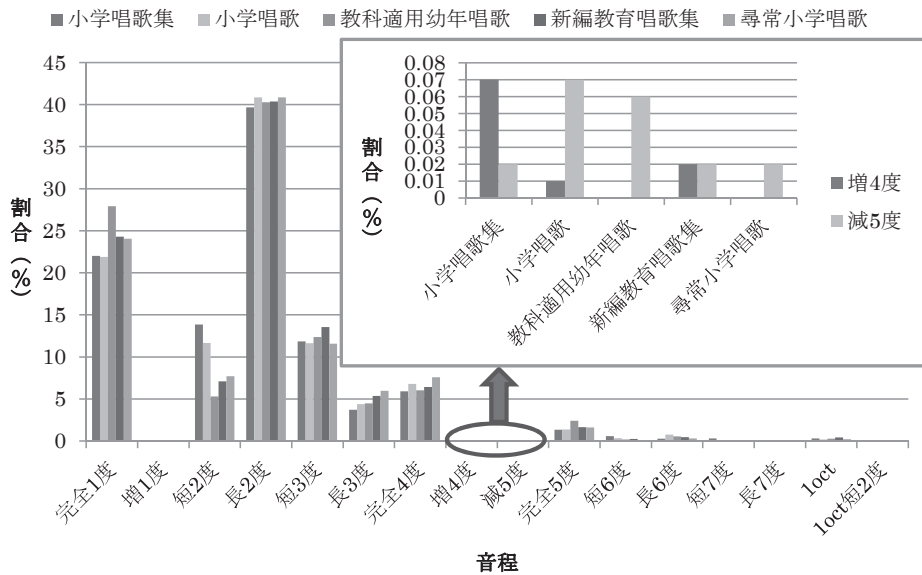


図5 音程の変遷

音程に関して、明治前期から後期を通して、長2度の音程の割合が最も高く、次いで完全1度の音程、そして、短3度の音程の割合が高いことが明らかになった。完全1度の音程は、全唱歌集において見られ、各唱歌集で2割以上を占める。また、『教科適用幼年唱歌』でその割合が最も高い。短2度の音程も、全唱歌集で見られるが、明治前期においてその割合が高い。長2度の音程は、全唱歌集において見られ、各唱歌集でほぼ4割を占める。短3度の音程は、全唱歌集で見られ、『新編教育唱歌集』においてその割合が最も高い。長3度の音程は、全唱歌集で見られ、明治後期にかけて、その割合が高くなる。完全4度の音程も全唱歌集で見られ、『尋常小学唱歌』でその割合が最も高い。増4度の音程は、『小学唱歌集』と『小学唱歌』、そして、『新編教育唱歌集』において、わずかに見られる。また、減5度の音程は、全唱歌集において、わずかに見られる。完全5度の音程は、全唱歌集で見られ、『教科適用幼年唱歌』でその割合が最も高い。短6度と長6度、そして、短7度の音程は、全唱歌集においてわずかに見られる。長7度の音程は、『小学唱歌集』でのみ、わずかに見られる。1オクターヴの音程は、全唱歌集で見られ、『新編教育唱歌集』において、その割合は最も高い。1オクターヴ短2度の音程は、『小学唱歌集』においてわずかに見られる。以上のことから、歌うのが難しいとされる増4度と減5度の音程に着目すると、明

治前期から後期にかけて、徐々に減少していることが分かる。したがって、明治後期の唱歌集では、児童の歌唱技術を考慮した音程を採り入れていたことが明らかになった。一方、明治前期の『小学唱歌集』のみ、1oct短2度の音程が0.02%見られ、増4度の音程と減5度の音程の割合も、他の唱歌集に比べて高いことから、歌うのに技術を要する曲が含まれているという点で、児童の発達段階があまり考慮されていないことが明らかになった。

IV 総括

本論では、『小学唱歌集』、『小学唱歌』、『教科適用幼年唱歌』、『新編教育唱歌集』、『尋常小学唱歌』の分析をおこない、それぞれの唱歌教材の特徴を検証してきた。拍子や音価に関して、児童の心情や発達段階を考慮したと思われる曲では、短い音価や付点などのリズム、そして、4分の2拍子などの拍子によって、軽快な曲調を生み出していることが分かった。また、明治後期にかけて、若干ではあるが音域が狭まっていること、歌うのに技術を要する複雑な音程や長い音価の割合が減少していることが明らかになり、これは、明治後期にかけて唱歌教材が児童の発達段階をより考慮したものになったと考えることができる。

今後の課題としては、調性の分析において、日本音階として分類したものをさらに細かく分析することにより、明治時代における唱歌教材の新たな側面を見いだす可能性があると考えられる。また、今回取り上げた5つの唱歌集以外に、さらに多くの唱歌集を分析することにより、明治時代における唱歌教育の包括的理解を導きたい。

[引用・参考文献]

- ・海後宗臣編（1965）『日本教科書体系 近代編 第二十五巻 唱歌』講談社。
- ・国立音楽大学音楽研究所編（1980）『唱歌教材目録（明治編）』国立音楽大学音楽研究所年報第4集。
- ・国立音楽大学音楽研究所編（1985）『唱歌索引（明治編）1—曲名・歌詞索引』国立音楽大学音楽研究所年報第5集「昭和55年度版追録」pp.615-629。
- ・三村真弓（1993）「明治期幼稚園の唱歌教育に関する研究」広島大学大学院教育学研究科教科教育学専攻修士論文。
- ・杉田政夫（2000）「わが国の学校音楽教育におけるヘルバルト主義の影響—教授法書および教科書の分析を通して—」『日本教科教育学会誌』第23巻第3号，pp.43-52。
- ・山本正（1985）「『唱歌』成立過程への一考察」『弘前大学教育学部紀要』第53号，pp.71-78。

[第一次史料]

- ・伊澤修二編（1892）『小学唱歌』（第一巻）。
- ・伊澤修二編（1892）『小学唱歌』（第二巻）。
- ・伊澤修二編（1893）『小学唱歌』（第三巻）。
- ・伊澤修二編（1893）『小学唱歌』（第四巻）。
- ・伊澤修二編（1893）『小学唱歌』（第五巻）。
- ・伊澤修二編（1893）『小学唱歌』（第六巻）。
- ・教育音楽講習会編（1906）『新編教育唱歌集』。
- ・文部省編（1911）『尋常小学唱歌』（第一学年）。
- ・文部省編（1911）『尋常小学唱歌』（第二学年）。
- ・文部省編（1912）『尋常小学唱歌』（第三学年）。
- ・文部省編（1912）『尋常小学唱歌』（第四学年）。
- ・文部省編（1913）『尋常小学唱歌』（第五学年）。
- ・文部省編（1914）『尋常小学唱歌』（第六学年）。
- ・文部省音楽取調掛編（1882）『小学唱歌集』（初編）。
- ・文部省音楽取調掛編（1883）『小学唱歌集』（第二編）。
- ・文部省音楽取調掛編（1884）『小学唱歌集』（第三編）。
- ・田村虎蔵，納所弁次郎編（1900）『教科適用幼年唱歌』（初編上巻）。

- ・田村虎蔵, 納所弁次郎編 (1900) 『教科適用幼年唱歌』 (初編中卷)。
- ・田村虎蔵, 納所弁次郎編 (1901) 『教科適用幼年唱歌』 (初編下卷)。
- ・田村虎蔵, 納所弁次郎編 (1901) 『教科適用幼年唱歌』 (二編上卷)。
- ・田村虎蔵, 納所弁次郎編 (1901) 『教科適用幼年唱歌』 (二編中卷)。
- ・田村虎蔵, 納所弁次郎編 (1901) 『教科適用幼年唱歌』 (二編下卷)。
- ・田村虎蔵, 納所弁次郎編 (1902) 『教科適用幼年唱歌』 (三編上卷)。
- ・田村虎蔵, 納所弁次郎編 (1902) 『教科適用幼年唱歌』 (三編下卷)。
- ・田村虎蔵, 納所弁次郎編 (1902) 『教科適用幼年唱歌』 (四編上卷)。
- ・田村虎蔵, 納所弁次郎編 (1902) 『教科適用幼年唱歌』 (四編下卷)。